

宗教と臨床現場との関係：認知症高齢者の心的世界と宗教性

大村 哲夫（東北大学）

fntohmura@gmail.com

はじめに：

各種の意識調査の結果、多くの日本人は「宗教」を信じないが、宗教的習俗である墓参りや初詣は行い、死後の魂を認めるという宗教的な心性をもっている。発表者は、信仰を自覚し教団に所属するような「宗教」「信仰」をもつ人ではなく、無自覚な宗教的心性をもつ人びとの心理や行動に関心を寄せている。発表者はこうした心性を「宗教性」と呼び、「人びとが自分または、自他の間に働き、自らコントロールできない事象に対してとる合理性に捉れない態度、または意味づけ」（大村 2010, 2015）と規定している。おみくじやお守りを大切に、ジンクスを気にするなどの行為は人の心理や行動に影響を与え、宗教的心情の根柢となるからである。

したがって発表者は、「宗教」と「臨床現場」ではなく、「宗教性」と「臨床現場」と置き換えて考察したい。臨床現場でクライアントと会う場合、心性の根柢にある宗教性を蔑ろにすることはできない。発表者は心に宗教性がある以上、「敵」でも「味方」でもなく、「心」そのものであると考える。

本発表の概要：

今回の発表では、認知症高齢者のもつ宗教性がどのように展開され、それが死の受容にどう関わったか、ということを紹介する。

「認知症」は、人格の変化と介護の困難さのため忌み嫌われている疾患である。全国に分布する「ボケ封じ」や「ぽっくり祈願」などの民間信仰の存在は、こうした症状になることなく健康な状態を維持したいという人びとの願望を反映していると言える。しかし「認知症の人又はその予備軍」は65歳以上で四人に一人、今後大幅に増加する（厚労省、2015）とされ、多くの人死を迎える前に通過する一般的な症状である。死へのプロセスとしての認知症を患うことに、何らかの意味を見出すことができるのだろうか。

発表者は臨床心理士として認知症高齢者へ、軽症時から死に至るまで数年に亘る継続的心理面接を行い、その言動を観察・分析した。

その結果、1、本人にとって大切な記憶は保持されていること。2、症状の進行と共に意識水準が低下し、死者や神仏が出現したり過去の記憶が「現実」として再現されること。3、こうした不合理な世界は、本人にとって「Psychic reality（心的現実）」であり、本人のもつ心的に健康な合理的解釈と矛盾することなく受容可能であること。などがわかった。またこうした生と死が混在する世界に遊ぶことで、死の不安が軽減し穏やかな死の受容をもたらす、家族にとってもよい看取りとなることなどが示唆された。

今回紹介した80代男性の4年にわたる事例では、訪問当初は太平洋戦争当時や戦後の思い出話が語られていた。話には整合性があり合理的で、正確であると推定可能な内容であった。しかし認知症の進行と共に、現実の世界に過去のエピソードが混入するようになり、非合理的な心的世界が展開されるようになった。死者（父母や祖父母、兄弟、幼馴染みなど）や不在の人物（息子、「ヒラリーさん」）が登場し、「お地蔵さん」「仏さま」「幽霊」

「お化け」など超自然的な存在も出現するようになった。出現する死者は、本人にとって親しみのある存在であることが多く、恐怖や不安を惹起するものではなかった。超自然的存在の出現に対しても同様で、むしろ死や宗教的存在に対して親和性を感じていたと観察された。語りはエピソードとして死と再生を繰り返しながら、大きなストーリーとして徐々に死に近づいていく傾向が見られた。

これらのことから認知症高齢者の世界は、現実と非現実の混在する世界、生と死の共存する境界領域であり、症状の進行と共に徐々に非現実世界・死の世界の領域に移行していくと考えることができる。この緩やかな移行によって死に対する不安が緩和され、親しみのある思い出の世界への帰還として捉えることが可能となり、死の受容につながるものと考えられる。またこうした「親しい死者のいる世界への移行」という捉え方は、認知症高齢者の家族にとっても穏やかで安心できる看取りにつながる。患者死後における遺族のグリーフ・ワークにも効果的であろう。

現代人にとって忌避される「認知症」は、その介護負担の重さや徘徊などの問題が存在するため決して軽視できるものではない。そのための支援策が必要であることは発表者も十分認めるところである。しかし死の受容という点から見れば必ずしも否定的な面だけではない。認知症高齢者の心的世界を死の受容プロセスとして肯定的に見ることで、本人や家族にとって受け容れ易い死の受容につながる一面もある。

認知症高齢者の死の受容

